

学内広報

2013.7.25

no.1441



東大生を「よりタフに、よりグローバルに」育成するためのチャレンジ・プロジェクト
体験活動プログラム全報告

東大生を「よりタフに、よりグローバルに」育成するためのチャレンジ・プロジェクト

体験活動プログラム全報告

- ① 駆除された猪や鹿の解体、放任竹林の整備、倒れた竹の運搬、炭焼き窯作りなど。
- ② 「MIT Japan 3/11 Initiative」建築家グループの活動に参加。海外チームと協同作業。
- ③ 東京大学出版会で学術出版に関わる業務を体験。本を出版するための企画作りにも挑戦。
- ④ 日本語教室の授業にアシスタントとして参加。決められた曜日の授業を1人1クラス以上担当。
- ⑤ 振付家の香瑠鼓氏、森山開次氏、近藤良平氏を講師に迎え、ダンス創作活動を体験。
- ⑥ 島田療育センターはちおうじにて、外来小児に対する支援や不登校児童の支援の手伝いなど。
- ⑦ 東京国際フランス学園で、バカロレア取得に取り組む高校2年生の自由研究を補助。
- ⑧ 山中湖演習林にて、熊手で集めた落ち葉を焼く方法を学び、森林のあり方を学習。
- ⑨ 徳島県鳴門市の大塚国際美術館で美術館業務。挙式イベントに参加し、観光ガイドも体験。
- ⑩ 馬の世話と乗馬体験、子ヤギへの授乳、牛の搾乳や糞尿掃除、直腸検査などを実施。
- ⑪ 理学系研究科木曽観測所に滞在し、天体画像処理やパブリックアーカイブ化を実施。
- ⑫ 障がいのある生徒たちの学習支援や生活支援を行うプログラムにスタッフとして参加。
- ⑬ 長崎市の長崎原爆資料館で開催されたフォーラムで舞台設営と簡易通訳を体験。
- ⑭ 長野県東御市で温泉運営や「巨峰の王国まつり」をお手伝い。敬老会で体操の手本も披露。
- ⑮ 授業のアシスタントとしてディスカッションや会話のパートナー役となり、学習を支援。
- ⑯ 農地と林地の境目の印捜索、森林観察、森林博物館見学、材木の太さ・樹種の記録作業など。
- ⑰ 石川県加賀市の市長や職員の方々から研修を受け、行政の現状について意見を交換。
- ⑱ 羊の餌やり、水交換、羊舎清掃、爪切りなど。かぼちゃやジャガイモの収穫・箱詰めを体験。
- ① マレーシア・サラワク州のイバン族の地域に滞在し、デイセンター「ムヒバ」を整備。
- ② プラトンに関する国際学会を聴講し、講義を受講。最終日には学んだことを英語で発表。
- ③ ペトロナス工科大学の4つの授業に参加。マレーシア伝統の家やヒンドゥー寺院の訪問も。
- ④ 水族館や海洋生物の研究機関を見学し、モントレー湾の豊かな海洋生物群を体感。
- ⑤ 台湾の国立故宮博物院で学芸員業務を経験。国立台湾大学の学生とは夜市でも交流。
- ⑥ 欧州国際共同研究ラボがスイスで実施するinformation dayに参加し、学会を聴講。
- ⑦ ボストンにあるベンチャー企業で2週間のインターンシップを体験。MITの学生と交流も。
- ⑧ トマトやニンジンやビートなどの野菜を収穫。雑草取り、馬糞運搬、ジュース作りなども。
- ⑨ バリにある学寮でルームシェアをしながら、現地で活躍する東大卒業生と交流。
- ⑩ MITのSadoway研究室を訪問し、授業に参加。独立戦争に関わるフリーダムトレイルも訪問。

伊豆に学ぶ応用編 ～南伊豆という地域との連携に学ぶ



①南伊豆

日本語教室のボランティア



④本郷

即興ダンスワークショップ



⑤本郷

Internship program at Lycee Franco-Japonais de Tokyo



⑦北区

癒しの森の落ち葉焚き



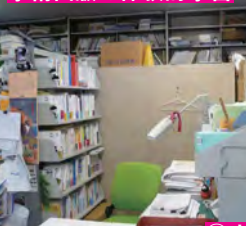
⑧山中湖

Disaster-Resilient Planning, Design + Reconstruction



②南三陸

学術出版の体験的学習



③本郷

障がいという個性に触れよう



⑥八王子

陶板複製名画美術館を体験する



⑨鳴門市

家畜の多様な役割



⑩笠間市

星空をすべての人のポケットに 天体画像の社会的利用促進活動



⑪木曽

障がいや難病のある高校生や大学生・読み書き障がいのある小学生のための大学進学・就労への移行支援プログラム DO-IT Japan



⑫駒場

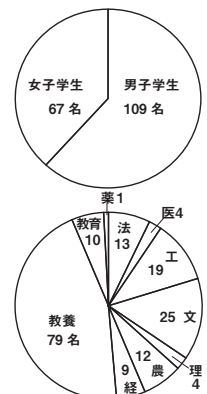
昨年からスタートした「体験活動プログラム」をご存じですか？ これは、本学の学部学生たちに、自分と異なる行動様式や価値観とふれあう機会を提供しよう、という理念のもとで始まった、入魂のプログラム。「タフな東大生」育成に向けた具体策の一つです。学内学外を問わず多くの方々の尽力で運営されているこの活動の一端を紹介します。

体験活動プログラムとは？

次世代を担う学生を「よりタフに、よりグローバルに」育成しようと平成24年度に始まったのが、体験活動プログラム。本部学生支援課体験活動推進チームが、関係各課と学外団体の協力をもとに企画・運営を行い、初年度は計36件（国内25、海外11）のプログラムを実施しました。平成25年度についてはすでに参加募集期間が終了。社会貢献、国際交流、就労体験、農林水産業・自然・地域体験、フィールドワーク体験という5本柱に、研究室体験という新ジャンルを加え、8月から順次実施が進められます。異なる価値観とのふれあいに足を踏み出そうとしている学生たちをぜひ応援しましょう。

平成 24 年度 体験活動 プログラムの 参加者の内訳

今回プログラムに参加した学生は計176名。学生全体の男女比からすると、女子学生の積極性が目立っています。学年別では1年34名、2年37名、3年58名、4年44名（5・6年3名）という結果に。



- ①9 富良野市を訪れ、演劇ワークショップに参加。老若男女が交流するまちづくり事業も体験。
- ②0 子供向けの科学教室や母親対象の茶話会に実施補助として参加し、地域のイベントを企画。
- ②1 自治体や市民団体がやっている子供のための教育プログラムの活動を補助。会場設営など。
- ②2 東京大学農学部（or埼玉大学）の臨海実習の補助業務。フジツボを取る作業、磯採集など。
- ②3 MOVIDA JAPAN株式会社で「かばん持ち」を体験。会議への出席、業務企画の提案など。

文化ワークショップを基本とした過疎・高齢地区のまちづくり体験プロジェクト ①9 富良野

まなびの茶話会プロジェクト @文京・葛飾 ②0 文京区他

「学びのポイントラリー」地域教育支援参加 ②1 文京区他

海のフィールドワーク体験活動 ②2 三浦市

混沌と夢が同居する超高成長企業でのインターンシップ ②3 港区

UROP at MIT ②0 アメリカ

■ 国内のプログラム
■ 国外のプログラム



体験者に聞いてみた! ～青森で農業・漁業体験の巻



法学部第2類4年

三浦 紘平さん

私が参加したのは、青森県の深浦町で昨年10月18～22日に行われた「農業体験と漁業体験」というプログラムです。ツイッターで友達がつぶやいているのを見かけて、どうせなら自分がやらなさそうなことを、と思ったんです。地元でレストランを経営しながらまちづくりに励む山本さんのお宅にホームステイして、様々な体験をさせていただきました。出荷工場で50kgの米袋をコンベアに積む

作業を手伝ったときには、地元の方が軽々と担ぎあげるのが信じられませんでした。畑ではカボチャやトマトの収穫を体験。地元の小学校訪問では、野球部の練習を手伝うことになり、小学生相手に本気を出してしまいました。「ちゃんちゃん祭り」という地元恒例のイベントではお客さんの案内と後片付けを担当。町の顔役の方に「これからの日本を何とかしてくれよ」といわれたのを思い出します。

特に印象的だったのは、三日目の朝に元漁師の方に連れられて、岩場でタコ釣りをしたこと。ニセ餌をひもで垂らしてヤリをおろすとタコがからみついてくるんです。刺したりする必要はなし。調子よく2時間で50匹ほど釣れました。生で食べるとタコの脚が口にまとわりついてくるのも貴重な体験でした。

以前は地方をひと括りで捉えていたんですが、深浦に行ってみて、各々の町には各々の歴史や文化があると実感しました。行政学の授業で学んだマクロな視点が現実の町というミクロな世界とつながったようにも感じて。

山本さんの店は駅前にあるんですが、電車が止まると必ず乗客に手を振っていました。それが交流の第一歩だと。人が減る中、できることを行う姿に感銘を受けました。就活が終わったらまた山本さんと話したいです。



農業体験と漁業体験@青森

@深浦町

受け入れ先からひとこと

青森県深浦町 新岡農園 新岡重光様
食べ物屋セイリング 山本千鶴子様

深浦町での体験を活かし、足腰強い、丈夫でたくましい人となり、日本国の土台となれ！与えられた使命を忍耐強く走れ！ 出会いに感謝！

体験者に聞いてみた! ～ニューヨークOG訪問の巻



教養学部文科Ⅱ類2年

村山 友香さん

昨年8月27～31日に行われた「アメリカで仕事の現場の話を聞いてみよう」というプログラムに参加しました。向こうで暮らしているOGやOBの方々の勤務先を訪ね、現場ならではの話を聞きましょうというもの。集合場所はニューヨーク。9人の女子学生仲間と相談して航空券を手配し、待ち合わせ場所のホテルでさつき会アメリカ（女子卒業生の同窓会組織）の大迫さんと会うことができました。

私たちが訪ねたのは、法律事務所、NPO法人、邦銀の現地支店、監査事務所、ヘッジファンド、コロンビア大学など。そのほか、国際連合の本部を見学したり、国連で働くOGとのランチミーティングをしたり、プリ

ンストンで農場体験をしていた学生仲間との食事会をしたりと、盛り沢山の毎日でした。

職場訪問では、日本とは違うと感ずることがいくつかありました。たとえば、会議室にたいていコーヒーなどのドリンクやチョコレートなどのお菓子が置いてあったんですが、日本の会議室ではあまり見かけませんよね。デスクが仕切られて個室のようになっていたのもそう。日本だと机を横並びに置くのが普通かと思うのですが。なんとなく日本で働くイメージしかなかったんですが、海外のこういう環境で働くのもいいなと思いました。

いろいろなお話を聞けましたが、印象的だったのは、日本についてきちんと勉強してお

体験者に聞いてみた! ～フランス大使館でリサーチの巻

昨年の10～12月に南麻布の在日フランス大使館で行われたプログラム「Documentary research for the French Embassy」に参加しました。週に1～2度、警備が厳重な原子力部という部署に通ってリサーチを行い、レポートを英語で書いて発表するという内容です。私に与えられたテーマは「原子力に関する世論」。原子力利用についての賛成派と反対派、それぞれの男女比、年齢比、職業分布、交流関係といった属性をネット上に公開されている情報から割り出し、それをレポートにまとめました。最後の発表は約20人もの現役大使館員を前に英語でプレゼンテーション。緊張の連続でしたが、大変勉強になりました。

体験活動を知ったのは学食でポスターを見て。このプログラムを選んだのは、フランス語を選択していたのでこの国に関心があったのと、授業で各国の原子力への対応の違いに興味があったからです。脱原発を決めたドイツとは対照的に、フランスは推進の姿勢を維持していて、それがどういうことなのか気になっていました。国内にしながら国際的な体験ができるというのも大きな魅力でした。

原子力の利用について、個人的にはどちらかというところと反対派でしたが、職員の皆さんと話すうち、なくすわけにはいかないかも、と

思うようになりました。問題点はあるにしても、長い目で見ると必要なのかな、と。振り返ると、遠慮せず職員さんにもっと質問をぶつければよかったな、という反省もあります。

以前から海外で働きたい気持ちはありましたが、今回の経験を経てそれが強まったように感じます。卒業後は海外で病院建設のコンサルティング業務に就く予定ですが、在学中にぜひフランスに行ってみなきゃ、とも思っています。



経済学部経済学科4年

大貫 潤さん



受け入れ先からひとこと 在日フランス大使館 原子力参事官 グゼリ・クリストフ様

学生の興味や経験について十分に話すことで仕事に道しるべをつけようと努力しました。彼女のレポートとプレゼンはとても優れていて、私たちも多くのことを学びました。次回はフランスの職場文化が自然体であることをもっと感じてもらえればと思っています。

けという方が多かったこと。それから、銀行員の方がおっしゃった、「会社の役に立ってない人間が社会の役に立てるわけがない」という言葉です。新鮮に感じたのは、5日間女子学生だけで行動したこと。東大ではいつも周囲が男子ばかりだからでしょうか。お話をしてくれるのもOGの方が多く、女性だからこそそのキャリアというものについてのリアルな声を気兼ねなく聞いたのも有意義でした。

今回の参加は、新聞記事を読んだ母が「東大で体験活動プログラムっていうのをやるみたいよ」と教えてくれたのがそもそものきっかけ。お世話になったOGの皆さんはもちろんですが、母にも感謝したいと思います。



受け入れ先からひとこと

さつき会アメリカ大迫政子様

グローバルリーダー育成という見地から体験活動は今後も是非広めていただきたいと思っています。学生から「世界が身近に感じられた」と聞くのは嬉しいことです。ニューヨーク以外の大都市、ワシントン、ロンドン、北京、ローマ、モスクワなどでも企画されれば素晴らしいです。

問い合わせ：本部学生支援課体験活動チーム (22541) 制作：本部広報課 (22031)

プロジェクトで復興を支援する

再生のアカデミズム

[実践編]

第12回

東日本大震災、それに伴う原発事故という未曾有の大災害の発生以降、東京大学では様々な形で復興支援を行っています。また、総長メッセージ「生きるともに」に表されているように、先の長い復興に向けて、東大は被災地に寄り添って活動を行っていく覚悟をしています。この連載では、救援・復興支援室に登録されているプロジェクトの中から、復興に向けて持続的・精力的に展開している活動の様子を順次紹介していきます。

プロジェクト名

福島復興農業工学会議(土壌除染の農業工学的研究)

忠犬ハチ公の飼主として有名な上野英三郎教授が創始した農業工学を継承・発展させてきた二人の教授が、放射性物質に蝕まれた福島県に寄り添い、地元とタッグを組んで土壌除染に取り組んでいます。熱い心でプロジェクトを推進している溝口勝教授にお話をうかがいました。

—— 同僚の久保成隆教授とともに、福島県飯館村の農地で除染技術の開発に取り組んでこられたんですね。

溝口 震災後、農業工学でできることをやろう、と決意して「福島復興農業工学会議」を立ち上げました。我々の学には、農地整備や灌漑排水の研究を通じて土や水を扱う技術が蓄積されています。それを復興に活用するのは、今でしょ！という思いがありました。

当時、津波に襲われた土地の復興と、放射性物質の被害を受けた土地の復興という2つの大きな課題がありましたが、前者については何をすればいいか見当がついていました。海水に浸かった土地は水をかけて塩を洗い流せばいい。あとはそれをどう実際に行うかです。しかし、後者については誰も経験したことのない未曾有の問題で、何をどうすればいいのかもわからない。これこそ大学の研究者が取り組むべき課題だと思い、飯館村の農地除染に集中するようになったのです。最初の頃は、研究者として現地に赴く許可がおりず、旅行者として現地に入ったこともあります。現場に行かないとわからないことが必ずあるからです。

—— 福島の除染作業というのは政府がリーダーシップを取っているんですよね？

溝口 はい。農水省が、表土はぎとり、代かき（田に水を張り、土をかきまぜ、表面を平らにする作業）、天地返し（反転耕）という3つの除染方法をマニュアル化しました。しかし、実際に現場に行

ってみると、イノシシやサルが入り、雑草が蔓延って地表面は荒れ放題です。冬は寒くて土がかちかちに凍る。とてもマニュアル通りにいくような状況ではないんです。現場を見て、国任せでない農家自らが実践できる方法を、自分たちで何か考えるしかない、と思いました。

冬に表面の凍土をはぎ取る方法、農家が除草に使う田車を活用する田車代かき掃出し法などを試した後、我々がたどりついたのが「までい工法」でした。

—— 「真泥」ですか？ Muddyですか？ それとも「待てい！」？

溝口 「までい（真手い）」とは、飯館村の方言で「丁寧に」「手間暇惜します」という意味です。農地の汚染表土をはぎ取り、掘った穴に埋めて固め、上をきれいな土で覆ってしまう。それを丁寧にやろうというわけです。表土はぎ取りと反転耕の組み合わせなので、農水省の推奨方法にも合致しているのがポイントです。—— きれいな土のカバーはありますが、汚染された土の上で作物を育てるわけですね。それで大丈夫なんですか。

溝口 理論上は、きれいな土を50cmかぶせるだけで地表面からの放射線量は1/100になります。田で使う深さはせいぜい15cmなので、作土層は50cmもあれば余裕です。5月にまでい工法を施した農地に田植えを行いました。秋の収穫がいまから楽しみです。

—— 汚染された土を穴に埋めるだけでいいなんて、画期的ですね。みんな揃って「までい工法」をやるべきでは？

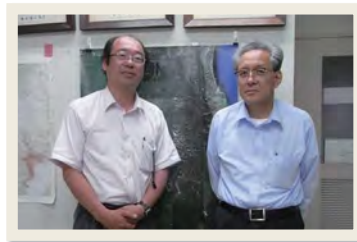
溝口 ただ、汚染土を埋設して固めるには一定の大型機械が必要で、誰もが手軽にできるわけではありません。農家は自分の手で除染できる方法を望んでいるのです。そこで我々が新しく取り組んでいるのが「泥水強制排水埋設法」。田んぼの横に溝を掘り、浅く代かきして出る泥水をそこに流すだけ。放射性セシウムのほとんどは粘土粒子に強く吸着していますから、代かきで粘土を泥水の状態にして排水するわけです。いまデータを解析

中ですが、もっとも有望な方法だと思っています。

今後は除染方法を提案するだけでなく、現場で自ら実行することの続けたいですね。現場で成果が役立たないとしたら農業工学を研究している意味などありませんから。TPPで日本の農業の行く末がわからない時代です。しかし不幸にも世界的に知られてしまった福島は逆にチャンスかも知れません。現場で実際に除染を行い、除染した田んぼで収穫した安全な米で作った日本酒を海外に輸出するという希望を持って、地元とともに復興を進めていきたいと思っています。



「までい工法」で穴に表土を埋めて固める作業の様子（2012年12月）。『美輪明宏がヨイトマケ歌うらしい』なんて話をしながらみんなで作業しました（溝口教授）



左・溝口勝教授（農学国際専攻）。右・本プロジェクト代表の久保成隆教授（生物・環境工学専攻）。福島復興農業工学会議を牽引する両頭です

プロジェクトに関する問い合わせ

大学院農学生命科学研究科
教授 溝口勝
amizo@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp



構成：本部広報課（内線：22031）

ききんの「き」

—東大基金で森を動かす—

第3回

石岡 吉泰

渉外本部コーポレート渉外グループ
特任専門職員

社会の期待に学内調整で応える!!

企業から大学への寄附といってもいろいろですが、私の守備範囲は主に数百万円の目的指定寄附。一回の訪問で寄附をいただけることはなかなかありませんので、何度も訪問してリレーションを構築・維持しながら寄附につなげるために日々奮闘しています。

まずは、どんな企業でも興味がありそうな大学の取り組みの紹介から話を始めます。今ホットなのはグローバル人材の育成です。

「よりグローバルによりタフにするために留学生受入と学生海外派遣の拡充を推進しています!」と言えば「それは素晴らしい!!」となります。でも「寄附しましょう。」とはなりません。寄附をすることが企業にとってもプラスにならないといけないのです。

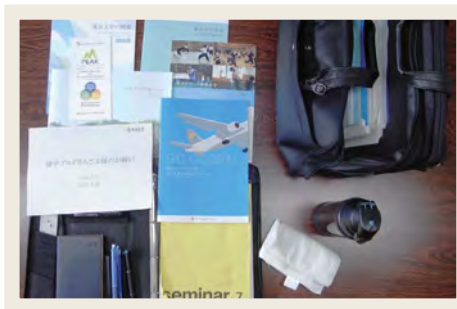
企業が事業を展開する国の留学生を支援することで学生の間での認知度が上がるとか、海外派遣を支援することがイメージアップにつながるとか、WIN-WINの関係になるように、学内を調整して企画を作ります。「こんなことはできませんか」と企業からニーズが出ることも。持ち帰ってニーズに応えることがプラスになるであろう部署を探して学内をまわります。外に出る部隊ですが学内調整も結構やっています。企業のニーズはいわば社会の期待、それに応えることで大学をよりよくする。欧米では寄附集め部門を『University Development』と呼ぶこともあるそうです。

『寄附集めを通じて大学をよりよくする。』

これこそが寄附集めの醍醐味だと思っています。

今後、みなさんのところに企業のニーズを持ってご協力をお願いに伺うこともあるかもしれません。ぜひ温かく迎えいただければと思います。

今回は寄附者の声(思い)をお届けします!



最近のかばんの中身。けっこう重い(〜〜)

東京大学基金事務局

TEL 03-5841-1217 : E-mail kikin@adm.u-tokyo.ac.jp
内線21217 : URL http://utf.u-tokyo.ac.jp/

留学生さん いらっしやい!

第2回

海を越えて東大に来た学生に聞きました。



スリランカ
ブラディーパ・
ラクマルさん

Pradeepa Lakmal

工学系研究科電気系工学
専攻 修士2年

コロンボ郊外のニリボラ村出身。バレーボールが得意で、高専時代には全国大会に出た経験あり。現在も活躍中。

Q. どうして日本に来たんですか?



母国で大学に通っていたときに国費留学の機会を得たからです。オーストラリアの企業で働く道もありましたが、戦後のどん底から急速に世界トップ級の技術大国へと成長した日本に興味を持ったので、来日を選びました。

Q. ではどうして東大を選んだんですか?

高松高専で3年学び、岡山大学に編入し大学院を選ぶときに、「知名度の高い大学に進んだほうが後々有利かも」と思ったからです。



Q. いま研究しているのはどんなこと?



電力システムの安定性についてです。松橋隆治先生の研究室で、風力や太陽光など、様々な方法で作られた電力を総合的にコントロールするための電源計画モデルを開発しています。

Q. 日本に来て困ったことはありますか?

来日1年目は漢字が全然覚えられなくて困りました。日本語学校で受けたテストの成績が悪かったんです。「こりや無理だな」と痛感し、思わず母国の親友に電話して「学校に僕の席残ってない?」と聞いてしまいました。



Q. スリランカをPRしてください!



海の美しさと人のよさ。あとは北海道の8割ほどの広さなのに世界遺産が8つもあります。写真は友達が故郷に遊びに来たときの。私の両親にいますのは父と妹です。



協力: 国際センター本郷オフィス 制作: 本部広報課

ワタシのオシゴト 第89回

RELAY COLUMN

農学部 森田 美由紀
農学生命科学図書館専門員

桑畑の隣の図書館で働いています



ツイッター@Todai_AgLibで情報発信中！

隣は桑畑。何とも農学部らしいロケーションにある農学生命科学図書館で、総務、予算管理、施設管理等を担当しています。

図書館って、いつも静かで整然としたイメージがありませんか？でも、たくさんの資料（本や雑誌など）があり、多くの人々が行き交うのが図書館。これを維持・管理するのもなかなかなのです。

実際の利用者対応や資料管理は他のスタッフにお任せし、私は専ら裏で環境作りにあたっています。例えば、やれ空調が壊れた！トイレが詰まった！虫が発生！等のトラブルが発生するや、農学系事務部に駆け込み、助けを得ながら対応しています。このほか、屋上掃除、粗大ゴミ出し、花の水やりなど…多岐に渡ります。

様々な業務に一貫しているのは、利用者やスタッフ、そして資料に「安全・安心で快適な環境」で過ごしていただきたいということ。そのために、声なき声に耳を傾けようと、日々館内を歩き回っています。

けれども、「快適さ」の感じ方は十人十色。そんな中で何が最善なのか、自問自答している毎日なのです。



農図スタッフをご利用お待ちしております

得意ワザ：ランチダッシュ！定時退勤ダッシュ！

自分の性格：せっかちな照れ屋

次回執筆者のご指名：田村政道氏

次回執筆者との関係：就職した時の職場の先輩

次回執筆者の紹介：今も変わらない永遠のバイク野郎

Crossroad

産業界と大学がクロスする場所から、産学連携に関する“最旬”の話題や情報をお届けします。

産学連携本部

第92回

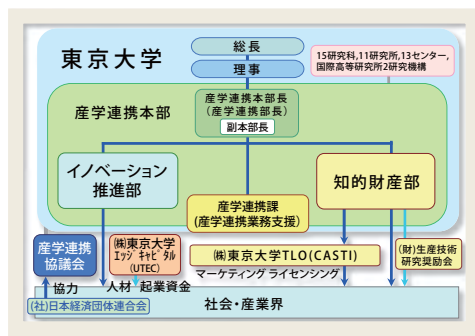
SanRen対談 vol.3

「産学連携本部発、“大学力”の活かし方」

産学連携本部の保立和夫本部長と、イノベーション推進部の各務茂夫部長による対談の最終回です。「折れない心」と当本部の役割について伺いました。

各務 「偶然の女神」あるいは「偶然のマネジメント」といって、発明や発見をする人物にとってみると、心の準備がある人に限って偶然は微笑むという考え方がありますが、研究者にしても事業を興すアントレプレナーにしても、「折れない心」を持って取り組むことが優れた結果につながっているように感じます。困難を乗り越えられるだけの「折れない心」を持つことは、やり遂げた人物すべての共通項であって、研究者の世界にも同様なことがいえるのではないのでしょうか。

保立 本学の勉強にしっかりと取り組んだ学生はそういうマインドが培われていますし、本質を突く力もありますから、「折れない心」を比較的持っている学生の集団であると思うんですね。大学における産学連携活動が活発的に展開されるためにも、新しく創設したイノベーション推進部の役割は大きいと考えていますが、お互いの立場と論理を尊重しあい、ともにイノベーション創出に取り組んでいく姿勢が大切でしょうね。大学における研究の神髄はオリジナリティであり、科学技術創造立国を標榜する日本において、大学には創造研究の推進が求められています。日本経済再生のためにも、研究成果を産業・社会への実装にどのようにつなげていくのかという命題に取り組むことが、社会と大学との仲立ちとしての当本部の重要な役割のひとつとしてさらに重視されるでしょう。今回の組織改編では、大学内外の関係者がより意欲的に取り組めるように、時代の要請を受けとめながら組織を挙げて全力で取り組んでいこうと考えています。



産学連携本部の新組織

全文はコチラ！
<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/jp/information/crossroad/index.html><http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

インタープリターズ・ バイブル

第72回

総合文化研究科 特任講師
教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター養成部門

山邊 昭則

新しい時代のリベラルアーツを考える

タイトルは、筆者が今学期新たに開講したゼミの名称である。近年、国内外で教養教育改革について熱心な議論が行われている。私自身、日本学会会議の「大学教育の分野別質保証の在り方について」や、本学の関連資料などから多くを学んできた。また、今の教育の別の世界的潮流として、Educator-centeredからLearner-centeredへと重心が移ったことも挙げられよう。医療の世界がPatient-centeredへ向かったのと同様に、そもそも大切なのは何か、ということが問い直されて得られた帰結である。そうしたなか、教育者が教養について考えを深めることは変わらず大事である一方、次の時代の担い手である学生が自ら考え、その議論を充実させていくことは、これまであまり取り組まれてこなかったからこそ、有意義なのではと感じたのである。ちなみに筆者は、リベラルアーツのキャンパスで学生時代を過ごし、最初に教育・研究職としてご縁をいただいたのが、この駒場の地であったため、リベラルアーツに育ててもらったという思いが強い。

授業はアクティヴラーニングの手法で、アナログ、デジタル、エッセイの三種で表現するようにデザインした。前身の科学コミュニケーションゼミと同様に、百数十名の多くの希望者が興味を示してくれた。選抜を通過した受講生は早速様々なアイデアを見せてくれている。大学での豊かな学びの動機づけとなる初年次教育として、また、文ⅡⅢ、理ⅡⅢの全種類からの参加に恵まれたため、次世代型の異分野融合教育としての意義も持つように意識している。

科学コミュニケーションも含め、こうした本学での教育活動を国際会議等で継続的に紹介している。アジア、アメリカ、ヨーロッパ、その他様々な地域の方々から好意的な反応をいただくことが多い。今も国際教育の世界大会でアルゼンチンに滞在しており、本日締め切りの受講生のエッセイが続々と地球の裏側へ届きつつある。これらはインタープリタープログラム修了生で出版社に勤務する仲間の力を借りて、電子書籍の形態にまとめ、ゼミ生で共有する予定である。

こうしたささやかな試みが種をまく役割を果たし、学生の皆さんの豊かな将来がそれを芽吹かせてくれて、やがて国内・国際社会に有意義な貢献ができればと願い、ブエノスアイレスの朝を過ごしている。

科学技術インタープリター養成プログラム
<http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/>

救援・ 復興支援室 より

第26回

本学の救援・復興支援室の最近の状況や、
遠野分室の日々の活動の様子をお届けします

救援・復興支援室の活動(6月～8月)

6月4日	救援・復興支援室会議
6月～7月	岩手県陸前高田市「学びの部屋」 学習支援ボランティア
7月～8月	福島県相馬市「寺子屋・相馬育英館」 学習支援ボランティア
8月	平成25年度夏季ボランティア隊の活動
8月	福島県大熊町の避難生徒への学習支援ボランティア

遠野分室ものがたり

本部企画課係長(遠野分室勤務)

文：赤崎 公一

「あれから2年」。

私事です。7/1付けの人事異動で遠野市を離れる事となりました。

赴任当初は、余震が続く殺伐とした雰囲気の中で、国・県・遠野市・他の自治体関係者等と震災対応・復興支援活動への「熱い」議論・情報交換が行われていた事が懐かしく思い出されます。

あつと言う間の「2年間」でしたが、通常のデスクワークでは決して味わえない体験・経験・達成感、なにより信頼関係・絆の大切さを改めて実感させて頂き、自身大きく成長出来た「貴重な2年間」となりました。

大きな事故等もなく救援・復興活動への後方支援が行えたのも、本田遠野市長をはじめとする各自治体関係者、濱田総長、前田救援・復興支援室長をはじめとする多くの本学関係者からのご支援・ご協力のおかげであり、感謝の念に堪えません。

遠野市は離れますが、また違う形で故郷「大槌町」復興のご協力をさせて頂ければと思っています。

震災は「現在進行形」です。引き続き、被災地復興へのご支援をよろしく願います。

どんどはれ・・・



遠野分室メンバー(左)と現在の大槌町内の様子(赤崎自宅)



http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info_j.html
Email: kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
内線: 21750 (本部企画課)

トピックス

全学ホームページの「トピックス」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/topics/>)に掲載した情報の一覧と、その中からいくつかをCLOSE UPとして簡単にご紹介します。それぞれの記事の詳細は、全学ホームページよりご覧ください。

掲載日	担当部署	タイトル	実施日
6月19日	本部国際交流課	東大留学フェア 2013 Go Global を開催しました	6月6日～7日
6月19日	大学院新領域創成科学研究科	「柏キャンパス in 駒場 2013」開催報告	6月1日
6月20日	産学連携本部	「アジア・アントレプレナーシップ・アワード 2013」開催	5月29日～31日
6月21日	本部国際企画課	第10回プレジデント・カウンスル（タイ・バンコク）の開催	5月29日～30日
6月24日	本部奨学厚生課	平成25年度東京大学光イノベーション基金奨学金証書授与式を開催	6月19日
6月26日	生産技術研究所	独マックス・プランク協会と「統合炎症学」分野を推進する研究センター設置に向け、合意書を締結	6月25日
6月28日	医科学研究所	第40回医科学研究所創立記念シンポジウム開催される	5月31日
6月28日	大学院人文社会系研究科・文学部	外国人留学生・外国人研究員等との懇親会が開催されました	6月20日
6月28日	大学院人文社会系研究科・文学部	第4回東京大学文学部公開講座を開催	6月15日
7月3日	大学院工学系研究科・工学部	本部棟1階展示	7月2日

(6月19日～7月18日掲載分)

お知らせ

人事異動情報など全学ホームページ「お知らせ」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/>)・東大ポータル等でご案内しているさまざまなお知らせを一部掲載いたします。

掲載日	担当部署	タイトル	URL
7月1日	本部人事給与課	人事異動（教員）	http://www.ut-portal.u-tokyo.ac.jp/wiki/index.php/人事異動（教員）
7月3日	本部人事給与課	名誉教授の称号授与	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/722/
7月11日	本部広報課	広報センター夏季臨時休館のお知らせ	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/758/
7月17日	保健・健康推進本部	保健センター（本郷・駒場・柏地区）の夏季診療日程について	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/773/



CLOSE UP 本部棟1階展示(大学院工学系研究科・工学部)



ガラス乾板写真

7月より、本部棟1階ロビーでは、工学系研究科の展示を行っています。

130年近くの歴史を誇る東京大学工学部(工学系研究科)は、その前身である工科大学の設立時(1886年)から現在に至るまで、内外の研究機関や産業界の人々とも共同しながら、世界の最先端を行く研究、高度の教育を進めています。

今回の展示では、工学系研究科の運営方針と国際化の取組、最先端の研究をパネルと映像でご紹介する他、工学系研究科の持つ歴史と最先端研究に触れる展示も行います。専攻数18と、研究内容も多岐にわたるため、期間中数回のパネルと展示の入れ替えを行います。「工学系研究科の歴史と今」をご覧くださいれば幸いです。



CLOSE UP

第10回プレジデント・カウンシル(タイ・バンコク)の開催 (本部国際企画課)



濱田総長によるスピーチ



討議の様子

平成25年5月30日(木)、バンコク(タイ)において第10回プレジデント・カウンシル会議が開催されました。

今回の会議は、カウンシル・メンバーであるタイ国チュラポーン王女殿下の招きにより、殿下が所長を務めるチュラポーン研究所(CRI)で行われました。8名のカウンシル・メンバー及び、濱田純一総長、江川雅子理事、羽田正国際本部長(副学長)、清野宏匡科学研究所長らが出席し、「The University of Tokyo's Strategy in Asia」をテーマに、総長によるスピーチ等に基づいて、ブランディング、海外パートナーとの連携、新たな奨学金制度、Diversity向上、在校生を含めたステークホルダーとの連携等、本学のグローバルな視点による運営に資する、

活発な討議がなされました。なお、殿下によるCRIの活動紹介、タイ国教育省高等教育委員会Varaporn氏(Deputy Secretary General)によるタイの高等教育政策に関する説明、清野所長及び江川理事による研究紹介及び渉外活動に関するプレゼンテーションも行われました。

29日(水)夕刻には、CRIにおいて総長主催歓迎レセプション及び、殿下主催晩餐会が開催されました。

次回会議は、平成26年7月17日(木)・18日(金)に東京で開催されます。

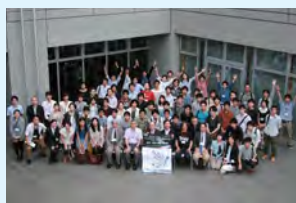
プレジデント・カウンシルについては、下記のサイトをご覧ください。

http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/b01_08_j.html



CLOSE UP

「柏キャンパス in 駒場2013」開催報告 (大学院新領域創成科学研究科)



参加者集合写真

柏キャンパスにある、大学院新領域創成科学研究科、物性研究所、大気海洋研究所、宇宙線研究所、カブリ数物連携宇宙研究機構(IMPU)の5組織の協力のもとに、6月1日(土)の午後、新入生・2年生のための交流イベントとして、「柏キャンパス in 駒場」(素粒子、物質から地球、宇宙の旅)が昨年度に続き2回目の試みとして、駒場キャンパスの21KOMCEEにて開催されました。

本学の三極構造の一翼を担う柏キャンパスは、学融合を目指した最先端科学の研究と大学院での教育を使命としていますが、駒場の新入生・2年生にとっては、あまり馴染みがないと言えます。しかし、若く柔軟な頭脳をもつ学生が、自らの大学院やその後のキャリアパスを考えて

いく上で、本学のもつ広範な最先端科学の研究・教育の広がりを認識し、進むべき道を考えていくことは重要であると考えています。本イベントはそのような駒場の学生の手助けになることを期待して企画されました。

イベントでは、柏キャンパスの5組織のトップが最先端科学研究の現状と将来展望について、科学の夢を拡げるとともに、専門的な話も分かりやすく展開いたしました。

駒場の学生や大学院の入学希望者などを含め、総参加者数は94名となり、参加者の評判も良く、有意義なイベントとなりました。柏キャンパスの研究・教育活動を盛り上げるためにも、継続的な努力をしていきたいと考えます。

「計算折紙(コンピューティショナルオリガミ)のかたち展」(大学院総合文化研究科・教養学部)



板金による自由形状折紙デモンストレーション

大学院総合文化研究科・教養学部 駒場博物館では、平成25年度夏期特別展として「計算折紙(コンピューティショナルオリガミ)のかたち展」を7月20日(土)から9月23日(月・祝)まで開催いたします。詳しくは以下のウェブサイトをご参照ください。

<http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/exhibition.html#origami>

表紙写真について



今号の表紙は、特集「体験活動プログラム全報告」(p2~5)より、マレーシア・ペトロナス工科大学のサマースクールに参加した学生たちの写真です。



「グローバル・キャンパスの形成」とイスラーム

2020年夏季オリンピックの開催地をめぐるっては、活発な招致活動が繰り広げられてきた。新聞報道によれば、IOC委員の判断基準は、「理念・治安・財政」の三点であり、東京は、後者の二つの点、治安と財政では優位に立っているという。一方、第一のポイント、理念というのは広い意味での文化に関わる問題であり、高得点を得るのは簡単ではない。イスラーム諸国をめぐる都知事発言が一時、取り沙汰されたのもこの問題と関係している。

国際線の飛行機では、ムスリムに配慮した機内食は当たり前のサービスであり、主要な国際空港にはイスラーム教徒用の礼拝室が備わっている。さて、日本の大学では、数多くのムスリムの留学生が学んでいるが、彼らの受け入れ体制の整備は、今後の大きな検討課題である。最近、進んでいるのが、大学の生協食堂でのハラール食（イスラーム法で許可された料理）の提供である。大阪大学、京都大学、名古屋大学、東北大学、九州大学など理工系学部にもムスリム留学生が多い国立大学を中心に、部分的な導入がなされている。

東京大学でも関係者の理解と協力を得て、本郷キャンパスの生協第二食堂でハラール食の提供があるが、これは学生団体の東京大学イスラーム文化研究会（TUICS）の働きかけによって実現した。筆者は、このムスリム留学生を中心にした団体の顧問をしているが、彼らが長年にわたって悩んできたのが礼拝所の確保である。毎週一回、金曜正午の合同礼拝は、器楽演奏のサークルの隣の部屋で肩身の狭い思いをして行なっている。また毎日行なう礼拝（一日5回）のスペースをそれぞれの研究科・学部の建物内で見つけるのも難しい場合が多いと聞く。

外国の大学での先進的な例が示すように、ムスリム専用の礼拝スペースであれ、宗教不特定の共同礼拝室であれ、宗教サービスの提供は、グローバル・キャンパスの必須条件である。なお最後に宣伝だが、10月6日に弥生講堂でTUICSによる恒例のイスラーム理解促進の講演会が開催される。関心のある方は、ぜひ足を運んでいただきたいと思う。

長沢栄治
(東洋文化研究所)